

ス ト ュ ベ ル
『外國爲替市場の安定問題』

Stuvel, G.: The Exchange Stability Problem.

Augustas M. Kelly Inc., 1951. viii, 242 p.

國際收支の均衡については、その均衡の攪亂が自動的に回復されるという、即ち國際收支均衡は常に安定均衡であるという古典學派の見解が比較的最近までの支配的なものであった。ところがこの見解は第1次大戰後における國際的金本位制度の崩壊によりひき起された國際通貨制度の激しい變遷、自由爲替相場的大幅な動搖、さらに今次大戰後のドル不足等の經驗を通じ、漸次反撃を加えられ、國際收支均衡の安定条件が多くの人々によって論ぜられてきたのである。この分野についての文獻も数多いのであるが、Stuvel はその先驅的研究としてマーシャルの 1879 年の論文「外國貿易の純粹理論」をあげ、彼の業績をたたえている。尤も Stuvel がいうようにマーシャルの貢獻を發見したのが彼ひとりではなく、ハーバーガーによっても指摘せられているところである。さて國際收支均衡が不安定であるケース、即ち爲替相場の切下げが入超を是正しないでさらに一層の切下げを必要とするようなケースが單にアブノーマルな、非現實的なケースに非ざることを強く問題にしたのはロビンソン、ブラウン、メツラー等であろう。これらの人々の得た結論に對して Stuvel のなしたことは、ティンバーゲンが本書の序文に寄せているように「……いま迄の諸説の結果——見矛盾し合うように見える——をより一般的なケースのうちの特殊なケースとして捉えることに成功した」ことであり、また「Stuvel は一般的代數式を與えたばかりでなく、彼が興味をもっている最終的弾力性〔爲替相場の變化に對する國際收支の弾力性〕の數値を計算することに努めた」のである。

國際收支の弾力性を形式化するためのモデル構成においては、いままでの諸モデルは two-country model であった。ピーカーダイク、ロビンソン、ブラウン等の傳統的な方法は二つの國をとりあげ、この二國の輸出供給、輸入需要の價格弾力性の結合によって、國際收支の弾力性を求めたものであった。これに對し Stuvel は爲替相場の變化が外國の所得・價格に及ぼす効果は、爲替相場を變化した國があまり大きくなければ、即ち國際貿易におけるその國の貿易額の割合が小さいならば、無視しようと考へ、従って外國の供給の弾力性は無限大であり、また外國の限界生産物中に含まれる自國生産物の割合は零であると前提して、1 國モデル one-country model

を構成した。この 1 國モデルによってみた國際收支の形式は 2 國モデルのそれよりも單純な形式であると思われるが、Stuvel のモデルは 12 の變數、10 の常數を含む 11 の方程式——17 の變數を含む 16 の方程式を更に單純化させてえたものである——から成っている。彼の方程式組織の特色は次の通りである。まず需要に關する方程式においては從來の 2 國モデルが外國生産物の輸入需要の價格弾力性を考へているのに對し、彼は輸入需要の代替の價格弾力性を考へている。2 國モデルでは代替の弾力性は考へられていない、即ちインプリシットに無限大であると前提していることになる。代替の弾力性を explicit に方程式組織の中に挿入することは、國際貿易における競争を完全競争として取扱わないことをいみする。そして國際間の競争を不完全競争として前提することの方がより現實的である。また供給方程式における彼の特色は爲替相場の變化に伴う貨銀率の變化を考へていることである。たとえば爲替相場の下落は輸入品價格の騰貴を伴い、これはさらに國內價格水準を上昇させる。國內價格水準の騰貴は當然労働組合の貨銀引上要求を激しくさせるであろう。勿論この場合労働なり生産設備がフルに使用されているかどうか、貨銀の引上げが價格の騰貴率と比例的であるかどうかが考へされねばならず、それらは適當な常數を與えることによって分析しうる。また輸入品の價格騰貴は貨銀のみならず國內品・輸出品の生産量にも影響をする。輸入品の價格騰貴が著しければ輸入品に對する代替生産が増大するであろうし、また輸出品の生産が外國の原料・半製品に大きく依存している場合には、輸出品の限界費用は相當に上昇するであろう。從來の 2 國モデルではこれらの條件が考へられていないから、Stuvel の 1 國モデルよりも單純な形を示している。Stuvel はロビンソン、ブラウンの 2 國モデルに 1 國モデルの前提である外國の供給の弾力性は無限大、外國品の限界費用中に含まれる自國品の割合は 0 という條件を入れて 1 國モデルに還元し、彼の 1 國モデルと比較している。そこで明らかとなることは、まずロビンソンのモデルでは次の通りである。(i) 生産費に含まれる輸入品の割合を考へていない、即ち輸入品價格騰貴に伴う自國の生産費の増加を考へていない。(ii) 爲替相場の變化による國內價格水準變化に伴う貨銀率の變化を考へていない。(iii) 雇傭量の變化と貨銀變化の關係を考へていない。(iv) 國際貿易における完全競争を前提としている。即ち輸入品に對する代替効果を考へていない。ブラウンにおいてはロビンソンと異って輸出生産物の限界費用の一部が輸入原料より成っていることを自國及び外國について考へている。ロビンソンでは外

國の輸入需要の弾力性が小であると國際收支均衡は爲替相場の變化に對して不安定になる場合でも、ブラウンの場合には安定化への要素がある。それが輸出品の生産費のうち外国品の割合を考慮することによつてもたらされた差である。従つてロビンソンの式にこの條件を挿入すればブラウンと同様の結果をうることができる。このようにブラウンはロビンソンと較べてより一般的な關係を考えたのであるがその他の點についてはなおロビンソンと同様の缺點をもっている。やはり國際貿易における不完全競争の現象、價格水準、雇傭量が賃銀に及ぼす効果を無視している。かくして、ロビンソン、ブラウンの2國モデルは非常に特殊な前提が充たされた場合にのみ適用できるものであることが明らかとなる。ロビンソン、ブラウンについて指摘された多くの特殊な前提は、Stuvel がふれていない人達、たとえばハーバーガー、ミード、ボラック等によつて部分的に修正されてはいるが、Stuvel の如く一般的ではない。

Stuvel は彼の得たモデルが複雑なので、さらに擇一的な前提を挿入しながら式を單純化し、種々の安定條件を吟味している。それでもなお彼の式は複雑である。その點彼の公式が instructive な目的には使用し難い缺點をもっている。

彼はさらに Chang が "Cyclical Movements in the Balance of Payments" でなした輸入需要・輸出需要に對する實質所得・相對價格の弾力性についての統計的な計算の結果を利用して、個々の國についての國際收支均衡の性質を分析している。Chang の計算の結果にはいろいろ反對もあるが、それを別としてもなお弾力性は經常勘定のうちの商品貿易のみに關したもので、invisible item を含んでいないから難點はある。また國際收支の弾力性については他の多くの常數の數値も統計的に得られなければ、確定的な解答をうることができない。しかしいちおうこれらの制約を留保しておいて、彼は Chang の弾力性の計算を土臺に、種々のケースについて計算を試みている。いまその結果についてみると、(1) 完全雇傭の場合には限界支出性向（消費財のみならず投資財への支出も含む）と國內の需要の價格弾力性の數値は、收支均衡の性質に本質的な影響を與えないが、著しい失業のある場合には決定的な影響を與える。そこで不況期においては國內需要が所得・價格の變化にいかん反應するかは、國際收支均衡の性質に重大な影響を與えることになる。 (2) 完全雇傭の場合には國際收支の均衡が indifference に近い國が多い。ドイツ、イタリー、ニュージーランド、日本、南亞、デンマーク等。米國、カナダ、フィンランド、ノルウェー、ハンガリー、オー

ストラリアの收支は fairly stable であり、U.K., スウェーデン、スイスは不安定である。失業のある場合には一般に動搖の程度が大きく、indifference の國は殆んどない。特にフランス、イタリー、ドイツは不安定の程度が高い。米國はあらゆるケースを通じて安定的な唯一の國である。

Stuvel が個々の國について算出した國際收支の弾力性の數値はまだ tentative なものにすぎない。われわれは常數を決定するデータについて多くの知識が必要であらう。また彼のモデルは1國モデルであるからその國の貿易が世界貿易において占める割合の小なる國にしか適用できない。従つて米國、英國の様に大きな割合をもつ國の分析には不適當であらう。しかし乍らこれらの國の比重が大きいということはそれだけその國の國際收支の均衡の性質についての知識が必要なのである。

しかし Stuvel の分析は若干の難點を含み、問題が残されているとはいえ、この分野における貴重な貢獻であることは異論のないところであらう。

(相原 光)

ミ イ ド

『國際貿易の幾何學的解明』

Meade, James Edward: A Geometry of International Trade. London, George Allen & Unwin Ltd., 1952. 112 p. + 51 diagrams.

1

現在ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスの教授たる J. E. ミイドは戦後既に大著 The Balance of Payments, The Theory of International Economic Policy, Vol. 1, 1951 とその Mathematical Supplement, 1951, とを公刊して着實さと多作とをうたわれているのであるが、矢つぎ早に「國際貿易の幾何學的解明」なるよくまとまった一書を出した。しかしこれらはすべて關連があり、同じ仕事だと見ていいであらう。ミイドは序文で「本書は貿易理論の分析にしばしば用いられる幾何學の基本的テクニクをシステムティックに提供することを企てている。」即ち嚴格な單純化された假定の下で國際貿易の純粹理論を展開することが主目的であつて、現實に起つている諸問題の解決については、これを基礎にして研究者、學生自らが應用すべきものであり、その若干は彼の前書や "A Geometrical Representation of Balance-of-Payment Policy" in *Economica*, Nov. 1949 に展開したと述べている。

たしかに國際貿易の純粹理論を、たとえ多くの假定の